

# 本を選ぶ

NO.403 2018年(平成30年)12月20日

●発行/ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

●<ろん・ぼわん>夜叉五倍子

●紙魚の繰り言 第22回

●『子ども文庫の100年—子どもと本をつなぐ人びと』

●「本」を読むきっかけ、読書の広げ方

●鳥の目 71

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## やしゃぶし 夜叉五倍子

クリスマスシーズンとあって、街中ではクリスマスツリーが溢れているが、最近洗練されたデザインのドライフラワーのリースやスワッグを見掛けるようになった。白樺の枝をダイナミックに束ねたり、真っ赤な唐辛子をびっしりと挿したリースなど、はっとするようなシーンに出会うこともある。さらにヒバ、モミ、トウヒ、イトスギといった針葉樹の生の枝や葉をあしらったり、木の実も挿してある。松などの実や落葉樹のカラマツや夜叉五倍子もよく使われるようだ。長く定番だった椈ひいらぎの葉のリースがもはや古くさく見える。クリスマス飾りの由来などについては『クリスマスの文化史』(若林ひとみ著/白水社/2010)や『よくわかるクリスマス』(嶺重淑・波部雄一郎編/教文館/2014)がわかりやすい。

バイオリン制作の師匠に誘われて、クリスマス一色の街を歩いて工房に行ってみると、古そうな分厚い板が何枚か用意されていた。引退した職人から分けてもらったとか。そのうちの数枚の樹種がわからないという。楽器のパーツに使われる黒檀や紫檀などの堅く重い木はお互いにすぐそれとわかった。1枚をよくよく見るとその地味な杳目からしてアルダーではないかと思われた。ブナ

やカバに近い樹木で、日本では榛の木(ハンノキ)として知られる木の仲間。夜叉五倍子も仲間だ。家具の部材とか玩具や道具の部品としてよく使われている。すぐ脇にやはり古ぼけた楽器ケースが置いてあったので見せてもらった。100年近く前の東ヨーロッパの楽器を引き取った際についてきたという。古くはあるがまだまだしっかりした作りで、ふたを開けてみると、なんとアルダーらしき部材が使われていた。話題はそこから自然とシューベルトの歌曲『魔王』へと移る。ゲーテの原作の詩がデンマークの伝承「ハンノキの王の娘」をもとに書かれているとか。音楽と木の話でしばし会話が弾む。

残る1枚の黒っぽい板が依然不明のまま。アフリカかブラジル原産の堅木と思われるが、自信がない。ならば、現物を預かって図書館で確かめてみようとなった。当初は、弦楽器の弓にも使われるスネークウッドかと思当をつけたが、杳目からするとタガヤサン(鉄刀木)かウエンジあたりに近いと推測できる。いずれもマメ科の木だ。

街の図書館の棚は、樹木については案外手薄な印象だ。図書館の規模にもよるだろうけれど、草花や園芸植物にどうしても偏りがちなのか、それとも樹木に関する出版点数が少ないのかもしれない。植物学や工芸など分野ごとにあれこれ渉猟した結果では、この黒くて重い板は目下のところ不明と言わざるを得ないと報告した。返ってきたお返事には、では差し上げましょう、とある。思わぬクリスマスプレゼントとなった。(埜村 太郎)

## 大食いのネコはトラ猫か

以前連載の第18回で、アスピョルンセンとモーのノルウェー民話集に、大食いネコ系列と思われる「なんて大食いのトラ猫」という題名の話が入っていることを内容細目から確認したうえで、最終的な確認がとれていないと書きました。

今頃になってですが、青土社の『ノルウェーの民話』（米原まり子訳／1999）を確認したところ、たしかに大食いネコ系列の話でした。大食いネコでも、絵本『はらぺこねこ』の話と「なんて大食いのトラ猫」の話がほぼ同じでした。ネコが飲み込む物が『ノルウェーの民話』の方がイタチ、リスなどと、もう少し多いのですが、月と太陽まで飲み込むところなどは、『はらぺこねこ』とそっくりです。つまり、『はらぺこねこ』の話は、北欧は北欧でも、ノルウェーの昔話だったということでしょう（ただし、『おなかのかわ』の元はどこの昔話かという問題は解決していません）。

そうすると、さらなる疑問に行き着くのです。「なんて大食いのトラ猫」のネコはそもそも「トラ猫」なのかという疑問です。

邦訳の題名でトラ猫となっているのだから、間違いないと思われるかもしれませんが、しかも、青土社版『ノルウェーの民話』の挿絵では明らかにトラ猫が、それも日本のノラネコでよく見かけるキジトラそっくりなネコが描かれています。この挿絵は「ノルウェー民話集」のオリジナルのテオドル・キッテルセンの挿絵を使っているのです。さらに、絵本『はらぺこねこ』のスズキコージさんの絵もトラ猫です。これだけ材料が揃えば、トラ猫は間違いないと思えます。

それでも少々納得できかねるところがあります。「なんて大食いのトラ猫」のノルウェー語の原題は Kjetta som var så fæl til å ete となります。kjetta をノルウェー語の辞典で調べると、メスネコを意味していると書かれています。こちらの方が内容に合っているのではないのでしょうか？

ネコが様々なものを飲み込んで、お腹が大きくなって、最後には破裂してしまい、その結果、様々なものを産みだす。出産を暗示するためには、メスネコであった方がいいのではないかと思うのです。ところが、オンライン翻訳を試してみると、kjetta はトラ猫を意味していると出てくるサイトもあります。

実は青土社版の『ノルウェーの民話』は英語訳からの重訳なのです。そこで、kjetta を英語にオンライン翻訳で訳すと、tabby となります。tabby は元は織物の平織のことですが、その模様から転じて平織と同じような模様のあるネコ、つまり日本で言えばトラ猫を指します。また、ネコ全般も意味するらしいのですが、特にメスネコを意味するようです（オスネコは tomcat。アニメ「トムとジェリー」のトムはオスなんでしょうね）。

日本の茶トラはほとんどがオスですが、欧米のトラ猫はメスが多いのでしょうか？ ただ、欧米の言語の場合は代名詞で性を示すことができるので、わざわざメスと言わなくても、メスだと分かります。結局は、ノルウェー語でも kjetta は、メスネコとトラ猫を意味するということらしいという結論でひとまず手打ちです。

## ノルウェージャンフォレストキャット

さてもう一つ、この挿絵に描かれたようなキジトラのネコがノルウェーにいたのかという疑問もあります。ネコ好きの方ならご存知だと思いますが、ノルウェージャンフォレストキャットという品種のネコがいます。『まるごとわかる猫種大図鑑』（学研プラス／2014）によると、ノルウェージャンフォレストキャットは古くからノルウェーの森林地帯に生息していて、北欧神話の中にも登場しているとのことでした。

このノルウェージャンフォレストキャットの毛の模様は縞模様（タビー）の種類は存在するのですが、そもそも長毛種なのです。そりゃあまあ、

寒いノルウェーを生き抜かなくてはならないのだから、体温を維持するために、長毛になるのは当然だと思います。しかし、『ノルウェーの民話』の挿絵のネコは長毛種とは見えません。どちらかといえば、短毛です。ということは、「なんて大食いのトラ猫」の挿絵のネコは別の品種のネコということになりますが、ノルウェーでは他にはどんなネコが飼われていたのでしょうか。昔話が語られていた時代には、どんなネコがいたのかということも興味のあるところですが、ノルウェー・ジャンフォレストキャットは大型のネコで、8～10世紀にバイキングがトルコの長毛種のネコを北欧に持ち込んだという説が有力だそうです。その時代のバイキングの荒くれ男が、ネコとどのように出会い、ノルウェーに連れていき、そのネコの子孫がどのようにして、ノルウェーの自然の中で生き抜いたのか、壮大な物語が描けそうです。想像してみると、わくわくしますねえ。

大食いネコの品種がいずれになるにしても、ネコがメスネコであるということは、ネコのお腹から様々な物がよみがえる、誕生することを示唆しているという点で、大きな意味があると思います。大食いネコの系列の昔話で、大食いひょうたんの話を以前に取り上げましたが、この話は小澤俊夫編、中山淳子訳『世界の民話 7 アフリカ』(ぎょうせい/1977)で既に紹介されていました。その解説で小澤俊夫さんがこの話は「日本の、牛方を食べようとする山姥の話」を思わせると指摘されています。

そうなんです。私もそんな気がしてきています。たとえば、『くわすによぼう』の話がありますが、によぼうが雨戸に並べたおにぎりを何個も次々と食べるシーンは迫力があります。あれは、しつくりとくる言い方ではないのですが、女性だからこそその迫力ではないでしょうか？

踏み込んで言えば、全てを飲み込もうとする母、ユング心理学でいうところの元型であるグレートマザー(太母)につながるのではないのでしょうか？

つまり、様々な物を飲み込み、再びよみがえら

せることができるのは、母なる性だということですね。たとえば、日本の神話で、日本の国を産むのはイザナミであると共に、黄泉の国を支配するのもまたイザナミです。

### 大食いは太る？

我が家のチビネコは特によく食べます。自分で足りないと思うと、前足をそろえて、おすわりの姿勢をとり、次のエサを寄せと要求してきます。おかげで、最近身体が大きくなってきて、少し太り気味になってきました。

今一番困っているのが、パウチに入ったウェットタイプのえさで、塊として扱える堅さのものであれば、食器からくわえて出して、床の上で食べることです。エサ場が汚れるので、やめさせる方法はないかなと、器を変えてみたり、塊で動かさない大きさにしたり(初めは動かさないで食べていても、塊が小さくなると動かします)、いろいろと試みているのですが、うまくいってません。

それにしても、大食いネコの盛んな食欲はエネルギーに満ちたプラスのイメージと考えていいのでしょうか？ また、太っていることは、いいことなのでしょうか？ 現代では、太り過ぎが健康を害するということから、どちらかという、やせている方が受けはいいようですが(ファッションモデルの世界では、やせすぎの見直しが始まっていると聞きます)。ただ、どちらかという、小太りの方が死亡率(?)は低いという話もあったと思いますが。

昔話の世界では、小さい、大きい以外はあまり体型についての言及はないように思います。私が思い出すのは、アスビョルンセンとモーのノルウェー民話集の中に『太陽の東 月の西』(岩波少年文庫/1958)「ちびのふとっちょ」というお話が入っています。このちびのふとっちょはおにばのトルロをやっつけてしまうのですが、太りすぎているとは表現されていません。おいしいものを食べるのが大好きとされています。

(さかべ たけし)

# 『子ども文庫の100年——子どもと本をつなぐ人びと』

鈴木 英果

いま、子ども文庫の本を編集しているのだと友人に話すと、私も子どものとき通っていた、という声がちらほらありました。東京や京都や広島、場所はさまざまですが、共通するのは、近所に「～文庫」という小さな木の看板がかけてある家があって、中に入ると、本がたくさんある部屋に「文庫のおばさん」や「文庫のお姉さん」がいて、ときどき行っては本を読んだり遊んだりしていたというものです。私の近所に子ども文庫はありませんでしたが、図書館にはよく行っていました。市民会館の3階にあるその図書館は日当たりがよく、窓辺のソファで本を読んでもくつろいでいたものです。学校とも家ともちがう、子どもが自由に出入りできる空間は、今で言ったら子どものサードプレイスということになるのでしょうか。

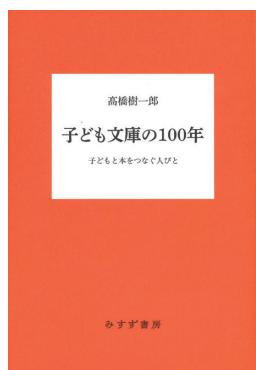
全国に何千もの子ども文庫が生まれ、一時は5000程の子ども文庫があったといいます。そこに通った子どもはかなりの数にのぼるでしょう。けれども、これまでその全貌がまとめられたことはありませんでした。それは子ども文庫の自由さによるものでもあります。

子ども文庫を始めるのは自由です。家を開放したり、公民館の一角で共同運営したりと形態も多様です。最近ではカフェで子ども文庫をすることもあるそうです。本を読む場所に徹するのか、行事をするのかも自由です。その自由さが子どもにとっては魅力だと思います。けれども、待っているだけでは、これほど多くの人の思いが詰まった活動でも、個人の記憶のままに消えてゆき、歴史にはならないでしょう。数年かけて全国の文庫をつぶさに訪ねることで、この本は生まれました。

公立図書館が整備される以前、子ども文庫は子どもと本が出逢う場所として大きな役割を果たしました。文庫と図書館がいつも関係し合っているのもおもしろいところで、自分たちの地域に図書館をつく

ろうという「図書館づくり運動」の担い手の多くは文庫の女性たちでした。地元の議員に陳情に行き、けんもほろろにあしらわれ、それでも図書館設立をみごと実現させた例もありました。女性たちは子ども文庫を始め、運営し、ネットワークをつくり、子どもの読書環境の土台をつくっていきました。文庫の人たちによる読書環境づくりは、歴史に刻まれるべき重要なものだと思います。

子ども文庫はそれぞれが個性的ですが、共通するのは、子どもと本が出逢う場所をつくらうという、大人としての真摯な思いだと思います。本書は明治から平成までの文庫の長い歴史を綴っていますが、そこには常に、子どもと本をつなぐ大人の存在がありました。かつての子どもとして、いま本を子どもに手渡す大人として、この小さく大事な活動の歴史と出会っていただけたらと思います。



『子ども文庫の100年——子どもと本をつなぐ人びと』高橋樹一郎著／四六判・344頁／定価3,240円(本体3,000円)／ISBN 978-4-622-08746-5／2018年11月1日刊行

## 【目次抄】

第一章 子ども文庫とは——その多様性

第二章 子ども文庫の先駆け——明治時

代の私立子ども図書館

第三章 民間人による私設図書館——大正から昭和のはじめにかけて

第四章 戦争に向かう時期にも、戦渦の中にも——戦前・戦中・戦争直後の文庫

第五章 女性の手になる文庫の広がり

第六章 親子読書運動と文庫のネットワーク作り

第七章 理想の図書館のイメージづくりに貢献したものの

第八章 文庫関係者による図書館づくり運動

第九章 文庫運動が残したもの——市民意識と私立図書館

第十章 少子化による文庫運動のかげりと、文庫をとりまく社会の動き

(すずき えいか:みすず書房)

# 「本」を読むきっかけ、読書の広げ方

溝上 牧子

あなたは本を読む人だろうか？ あまり読まない人だろうか？ まずこの誌面を読んでいることからして、きっと本が好きな人だと推測する。

一口に読書と言っても傾向は様々だ。性別も読書の傾向を探る1つの要因だ。自営業の人と、生涯サラリーマンの人が読む本は違うだろうか。ビジネス書を買うサラリーマンは多いだろう。女性は？ 料理、育児、趣味と守備範囲が広いような気もする。男向け、女向け、大人向け、子ども向け、老人向け、医者向け、様々な本が出版され、広がったり、狭かったりする読者層の中で人に読まれている。自分ひとりで本を選んで自分の好きなものに偏っていくことに気づく。それは悪いことではないが、どうせなら、いろんなものを見たり読んだりしたら、もっと頭も心も広がっていくだろうと思う。

何を隠そう私自身が一番偏った読書を続けてきたひとり。ではどんなふうに狭い読書範囲を広げているかという、自発的なものではないのだが、幸いにも出版社で働いている私は、普段なら読まないジャンルの原稿や、買わないであろう本などを、企画の参考に仕事として読むことがあるわけだ。しかし意外や意外、読んでみると知らなかったジャンルの本であっても面白く読めたりする。新しい目が開かれ、興味が湧くという経験を何度もした。単に食わず嫌いで手を出さないものの中に面白いものがあるということは覚えておかなければならない。

読書の強制ほどこいなものはないが、たまには騙されたと思って言われるがままに読むというのも悪くないのではないかと思う。知らなかったから興味がなかっただけというものは世の中にきっと、山のように存在するのだ。好きな有名人、尊敬する人がよかったというものを追うのもいいだろう。人という興味の対象はその人を好き、興味があるということで、共感を感じたくなるものなのだろう。例えばその人がおいしいと思うお菓子とか、着ている服をほしくなるというのも同じこ

と。あの人が読んだ本を読んでみたくなるというのは読書の大きいなきっかけや、意味付けになるだろう。

身近な人（それも出来ればその人に興味を持っているとなおいい）がすすめてくれた本を読んでみるのもいい。何回かお互いの好きな本の交換などをしてみるとその人がどんな人か、どんなものを好み、どんな考えをもっているか、そしてどんなレベルのものを理解するのが少しだがわかってくる。もちろん脳みその中身はそれぞれ違うし、今まで得てきた知識も違うので、私にはこの人がすすめてくれる本を面白いと思えない、理解できない（私の場合教養がないせいも多々あるのだが）ということもあるし、中にはこの人がすすめてくれる本はどれも面白いと思える本の相性が合う相手も出てくる。私のすすめる本を好きな人もいれば嫌いな人もいるだろう。それでいいのだと思う。同じである必要もないのだから。

しかし自分が面白かった本を人が面白かったと言ってくれるのは嬉しいものだ。もともと私は人に本をすすめるのが苦手な方だと思う。強制されたくない、したくないというのが大きな理由なのだが、本当を言うと、すすめた本を面白くなかったと言われるのが怖いのだ。情けないことに。単純なもので、面白かったといわれたらそれこそ有頂天で、次々紹介したくなってしまったり、もっと面白い本をみつけてやろうと、読書にも益々励むというわけである。先日読者の方と話をする機会があったときのこと。心がすさんだときに、心をリセットするために読む本があると言っていた。私にもそういう本がある。ここ最近のベストは、金井真紀 / 著『酒場學校の日々 フムフム・グビグビ・たまに文學』（皓星社）、佐藤まどか / 文山村浩二 / 絵『ミジンコでございませう。』（フレーベル館）だろうか。この人たちの言葉や表現の端々からは全てのものへの愛を感じる。力強くオススメしたい。（みぞかみ まきこ：朝北社）

# 鳥の目 71

—20世紀回想 ハヤブサ追跡物語2 ～アメリカを追って～—

為貞 貞人

『On the Wing ハヤブサに託した地図のない旅』（アラン・テナント著／鳥見真生訳／柏艚舎／2005年）は、著者がセスナ機の操縦士ジョージ・ヴォースと共に1980年代にハヤブサを追ってアメリカ大陸を飛んだロマンあふれる記録です。

ハヤブサ追跡用の受信機の貸与を陸軍から拒否されたアランは、自前で受信機を購入し、先に捕獲調査員に預けてハヤブサに装着した発信機が出す信号759番をようやく探知しました。

アランたちはこの雌のツンドラハヤブサを、1937年赤道世界一周飛行で南太平洋上に消えた空のヒロイン、女性飛行家のアメリカ・イヤハートにちなんで「アメリカ」と呼ぶことにしました。

## スカイホークの追跡が始まる

ある晴れた春の日の午後、アメリカはコンドルとともにらせんを描いてゆっくり帆翔しながら上昇するのが観察され、やがてコンドルから離れて、単独に飛び始めました。メキシコ湾のパドレ島に近いロブズタウンの滑走路を飛び立ったセスナ・スカイホークは、早速ナンバー759をキャッチしました。アメリカです。「実際に、そのハヤブサの鼓動まで感じとれるような気がして」アランは胸をおどらせます。しかし、アメリカがどんな旅へ連れていこうとしているのか、まったくわかっていなかったのです。スカイホークは積雲の中をぐんぐん上昇、時速145キロで追跡を開始しました。8キロ前方を飛ぶアメリカはもう変わりつつありました。「まるで遠い大空へ急ぐ天使のように」アラスカをめざします。

渡りのハヤブサの飛行は速く、陸や海を一日に数百キロも移動するといわれます。スカイホークはアメリカを追い越さないように飛び、アメリカが大きくコースを変え、らせん状に上昇し始めたところで追い抜きました。前方の地平線上にテキサス州中央部の都市、サンアントニオが見えてきたときです。薄汚れた茶色い雲が高層ビル群の上空を縁どっていました。そのころテキサスは何十年間もアメリカ全

土の有害廃棄物の3分の1を排出していました。アメリカはそのスモッグを迂回していることが分かりほっとし、田舎の滑走路に着陸しました。

スカイホークがサンアントニオをかなり過ぎたころ、アメリカは北寄りに飛び始め、渡り初めのコースに復帰していました。渡り鳥は風任せに飛び、星座を見て本能だけでコースを選んで飛ぶと思われがちですが、アメリカは正確に地理から飛行コースを決めていました。アランたちはとても大きな発見をしたことに気づきます。

## アメリカと空を分かち合う

アメリカは一日中風に逆らって飛び、テキサス南部のフリオ川の溪谷に舞い降りました。地上600mもある石灰岩の断崖です。おそらく去年の春や秋のときもここで休んだに違いありません。スカイホークの給油を終わり、ここに来た時にはアメリカは飛び立っていました。百年前までは多くのバイソンの群れが北上し、牛飼いたちの夢をかき立たせた北アメリカ中央部に広がる大草原を越え、ニューメキシコに入ると眼下の尾根を歩いているバイソンの群れに目を疑いますが、いまは観光用に飼育されたもの。大平原にそびえる円錐形の休火山カピュリンにさしかかったところで、いきなり乱気流に巻き込まれて機体が一気に押し上げられました。ワタリガラスが気流乗りをして遊んでいます。アメリカからの信号を失ったままコロラド州に入りました。

デンバーでスカイホークの故障を修理してワイオミング州に入り、地方都市シャイアンを後にしてノースプラット川の上を飛びます。この川筋は北アメリカ大陸の渡り鳥の中央ルートで、1950年代から絶滅に瀕したアメリカシロヅルの保護のため、メキシコ湾のアランサス保護区からカナダ北西部の営巣地までのルートとして重要視されてきました。

前日からアメリカからの発信音を失ったままワイオミング州ダグラスの飛行場に降り、夜明け前に飛び立つとまもなく、さほど遠くない南の平原

からアメリアの信号をキャッチしました。彼女はハクガンやカナダヅル、そして多くの小鳥たちと共にロッキー山脈の北壁ぞいに生まれる上昇気流に乗って北上して来たのです。スカイホークの翼の下で、白い翼をひらひらさせてペリカンの一群が飛んでいました。

カナダに入国して2日後にツルを見ました。白みゆく空から12羽のカナダヅルがV字型を描いて北西に向かっていきます。右に行けば北極海、アメリアは方向転換し、マッケンジー川の支流を西に向かって飛び始めました。今、彼女は心に描きつづけてき

た故郷にたどり着こうとしています。

「ひと目見ることも叶わなかった。それでも彼女は幻ではない」とアレンは思います。「彼女が飛んだその空を飛び、彼女の目が見たその景色を見た」「薄い機体を通して、同じ気流を感じ、同じ濃霧の向こうに目をこらし、同じ嵐、同じ雨を体験した」。そして「アメリアが感じていたことを、われわれも感じていたのだ」とロッキー山脈の東側3200キロ以上を守護天使となって導いてくれたアメリアに感謝するのです。

(ためさだ さだと:さいたま市図書館友の会)